〈3科型〉

二〇二五年度

適性検査Ⅰ

注　意

1　問題は **1** のみで、**5ページ**にわたって印刷してあります。
2　検査時間は**四十五分間**です。
3　声を出して読んではいけません。
4　答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
5　答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
6　**受験番号・氏名**を問題用紙と解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

聖徳学園中学校

受験番号					

氏　名

1

次の**文章1**と**文章2**を読んで、あとの問いに答えなさい。

（＊印のついている言葉には、本文のあとに〔**注**〕があります。）

文章1

＊家康が、人生は重き荷を負って遠い道を行くようなものだと言った。こういう言葉をどれだけ頭の中でわかったつもりになっても、それは絵に画いた餅ほどの意味もない。重い荷物をもつということも実感がない、遠い道を行くのは当然クルマでしょうね、飛行機ですか、などという連中には、家康の言葉は比喩としても成立しないかもしれない。

校庭で先生の話を十分も聞いていると、あちらでもこちらでも貧血をおこす。そういう虚弱な生徒たちに言葉を教えると、すべては空の空なるわかり方をする。身にしみてわかることがない。もっと、なまの経験、比喩でない現実に直接ふれるのでなければ、生きることにならない。

ある＊文豪が旅行した夜、蛙のなき声をきいて、あれは何だ、とたずねたそうだ。蛙のなき声を知らなくても、＊観念的読者の涙をしぼる小説は書けるであろう。むしろ蛙のイメージのみあって、実際の知識などないほうがよいのかもしれない。学校教育が普及することは本を読まされることにほかならない。蛙の声をききにゆきましょうというような学校はない。それで蛙をご存じない小説家が文豪とあがめられ、本がどんどん売れる。

どうも現代の教育はこまったもので、と評論家を気取って、＊慨歎したいところだが、こういうことは昨今に始まったものではなさそうである。大昔から、蛙を知らない文学者がわが国にはいたらしい。日本人は自然を愛するといわれる。その国で自然を題材にしている詩人たちにも、やはり自然についての第一次的、具体的知識が欠けていたと見られるのである。

＊『万葉集』の歌をみると、さまざまな鳥があらわれてくる。江戸時代の人の調べた本によると、三十五種とか五十四種とかの数字が挙っている。種類の多さもさることながら、鳥について実際に観察している歌が多い。かりに＊嘱目を詠んだものではなくても、歌人と自然とのあいだに生々しい共感がある。ところが＊『古今集』へ移ると、鳥がぱったり飛ばなくなってしまう。種類も限定される。夏の鳥としてはほとんど、ほととぎすだけが許された鳥である。からすのような鳥は不吉だとして＊タブーになる。

そのほととぎすにしても、一度も見たことがなくても秀歌ができるようになっている。ほととぎすの観察は必要ではない。詩歌らしく加工されたほととぎすだからである。自然へ目を向けるのではなく、心の中のイメージを注視すれば自然の歌も生れる仕組みである。これが不思議でなくなるところに、伝統の重みと力がある。文学において、観念化された自然の歴史はきわめて長い。蛙を知らなかった小説家は日本文学の伝統に忠実だったわけである。

文学が心象化された自然だけを自然として承認しようが、しまいが、それは文学だけの問題である。野暮な写生よりも洗練された遊びのほうがすぐれているかもしれない。ただ、そういう心の習性が生活全般に作用して、対象をはっきり見ることなしに、用意されているイメージを通してものを見る。あるいは、ものは見ずに感じだけで判断する、というようなことが普通になると、心のたくましさを失うことになるであろう。

自然を愛していると思っているのに、わが国では自然科学の発達がおくれた。他人のことをあれこれ絶えず意識しているのに、社会科学の考えもなかなか根をおろさない。そして、*徒らに*ことだまのみさき栄える。

（外山滋比古『日本語の個性』による）

〔注〕

家康――徳川家康。
文豪――とてもすぐれた作家。
観念的――頭の中だけで考える様子。
慨歎――嘆き、腹を立てること。
『万葉集』――現存する最古の歌集。
嘱目――その場で目に触れたもので俳句を作ること。
『古今集』――平安時代初期に作られた『古今和歌集』。
タブー――話題にしてはいけないこと。
徒らに――意味もなく。
ことだま――言葉にあると信じられていた力。

文章2

私は「クレーマー」と呼ばれるのは、何かを得たいために、自分でも無理だとわかっていながら、あえて激しく抗議する人々だと思っていた。

もちろん、そんな人もいるだろう。だが、一定程度、私の出会った若者のような人間もいるのではないか。読み取りができないために、自分が正しいと信じ、周囲の常識的な読み取りが理解できずに、孤独な攻撃をしているのではないか。クレーマーといわれる人たちに読解力テストをしたら（もちろん、してもらうのは大変難しいが！）、＊惨憺たる結果が出るのではないか。

クレーマーが増えているといわれる。もちろんそれには、読解力のない人も発信する手段を得たこと、以前は片隅で押し黙っているしかなかった人が権威に対して発信してもよいという意識を持つようになったことなどが原因として挙げられるが、もう一つ、㋐読解力の低下という問題もあるのではないか。

逆に言えば、読解力をきちんとつけ、文章を読み取れるようになれば、状況も人の心も今より読み取れるようになり、多くの人が周囲と健全なコミュニケーションが取れるようになるのではないか。読書というのは、まさしくコミュニケーションの一つの原形を形作っているともいえるものなのだ。

では、どのようにして日本人の読解力を養成するのか。どうやって、若者が文章をしっかりと読みこなし、難しい文章も理解できるようにするのか。

もちろん、文章をたくさん読むことが読解力の向上に最も効果的だ。私自身のことを言えば、読解力を高めるための勉強など意識的にした記憶はない。国語の問題集を解いたこともないと思う。ただ、中学生のころから、おもしろい小説やら世界的名著やら、時には読んでいるのを親に見つかったらこっぴどく叱られそうな読みものやらを手当たり次第に読んだ。そうこうするうちいつのまにか読解力がついていた。

きっと、ある程度読解力に自信のある人は、私と同じような経過をたどってきただろう。何かの特別な勉強をして読解力をつけた人など、いないに等しいのではないか。

だが、だからといって読書が当たり前の行為でなくなった現在、一昔前に読解力をつけた人のやり方をそのまま若者に強制するわけにはいかない。

そこで私がこれから示すのは、もっと効率的な方法だ。

具体的にはのちに説明するとして、ここでは理念だけを示そう。

私は、読解力をつけるには、言葉を実際に使うこと、文章を書くことが大事だと考えている。

サッカーの試合を深く見ることができるのは、どのような人だろう。もちろん、経験者だ。テレビのサッカー中継にも、かつて名選手として活躍した人が解説者として呼ばれる。

言うまでもないことだが、サッカー経験のない人がサッカーをしっかりと理解して見ることができるとは思えない。経験があるからこそ、選手の気持ちがわかり、いい作戦がわかり、それぞれのチームの作戦がわかり、その潜在力などもわかる。経験のない人がいくらテレビ中継を見ても、解説者の意見を口写しにして語るだけであって、本当の意味で理解しているとは思えない。

つまり、実際にプレイしたことのある人が、正確に、そして深く試合を見ることができるといえるだろう。それと同じで、文章についても、ただ読むだけの訓練をしても、深く読むことはできない。実際に言葉を操作し、文章を書くことによって、文章を理解できるようになる。そうするうちに、文章を読み取れるようになる。

英語の勉強をする場合、文章を読む力ばかりをつけようとしても、本当には読む力はつかない。会話ができるようになり、作文もできるようになってこそ、細かい*ニュアンスも含めて文章を正確に読むことができるようになる。

読み取るだけでは、細かいニュアンスはわからない。自分でしゃべり、人の話を聞いているうちに、それが皮肉を交えた言い方なのか、真面目な言い方なのか、ちょっと古風な言い方なのか、今風の言い方なのかがわかってくる。そうすると、文章を読むとき、筆者はどのような思いでその言葉を使っているのかがわかってくる。

（樋口裕一『「頭がいい」の正体は読解力』による）

〔注〕惨憺たる――見るのも気の毒なくらいひどい様子。
ニュアンス――びみょうなちがい。

〔問題1〕　現実の体験に欠けるとどうなると述べられているでしょうか。読解力以外の場合について、**文章1**・**文章2**で述べられていることを簡潔に書きなさい。

〔問題2〕　㋐読解力の低下とありますが、**文章1**の筆者は、読解力の低下の例としてどのようなことを挙げているでしょうか。連続する三文を探しなさい。ただし、一文めの最初の四字と、三文めの終わりの四字をそれぞれ書くこと。

〔問題3〕　あなたは、これからどのようにコミュニケーション力を身につけていきたいですか。今のあなたの考えを四百字以上四百四十字以内で書きなさい。ただし、次の条件と下の〔**きまり**〕にしたがうこと。

条件　①　**文章1**・**文章2**の筆者の、読解力に対する考え方のいずれかにふれること。

条件　②　適切に段落（だんらく）分けをして書くこと。

〔**きまり**〕

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますに書きます（ますの下に書いてもかまいません）。

○。と」が続く場合は、同じますに書いてもかまいません。この場合、。」で一字と数えます。

○段落をかえたときの残りのますは、字数として数えます。

○最後の段落の残りのますは、字数として数えません。

解答用紙

適性検査Ⅰ

氏　名

〔問題1〕

文章1

〔問題2〕

文章2

〔問題3〕

440　400　300　200　100　20

受験番号

得　点

※

※のらんには何も記入しないこと。

〈３科型〉